



日本で撮影された最古の写真が重要文化財に！

～練馬区長の志村豊志郎家に伝わる～

と き 平成18年3月17日告示

ところ

このたび、練馬区長の志村豊志郎氏が所有する銀板写真が、日本で撮影された現存する最古の写真として、国の文化審議会から重要文化財に指定するよう文部科学大臣に答申された。

志村区長が所有する銀板写真は、嘉永7年(1854)にペリー長官率いる黒船で来航した写真家エリファレット・ブラウン・ジュニアが浦賀奉行所与力だった志村区長の曾祖父である田中光儀(たなかみつよし)氏を撮影したもので、フランス人による1839年の銀板写真の発明後間もなく撮影されたもので、写真史上貴重であるばかりでなく、幕末の開港交渉という歴史上の出来事を伝える歴史資料としても大変貴重なものである。

現在、写真は東京都写真美術館が志村区長から寄託を受け保管している。

【銀板写真と撮影の由来】

1839年にフランスの画家ルイ・ジャック・マンデ・ダゲールは銀メッキした銅版にヨウ化銀を付着させて像を記録する写真術を発明した。これが銀板写真で、発明者の名前からダゲレオタイプともいう。現在のようにフィルムから焼き増しができるものではなく、一回の撮影で、一枚の銀板写真が出来上がるだけのもの。撮影される像は左右が逆になっている。

嘉永6年(1853)ペリー司令官率いるアメリカ東インド艦隊が浦賀沖に来航し、翌年、通商交渉のため浦賀に上陸した。この時黒船に同乗し、ペリーに随伴した写真家がエリファレット・ブラウン・ジュニア。ブラウンは帰国後の報告書の挿絵として停泊地の琉球、下田、横浜、函館で数百枚にわたる日本の風俗や風景写真をダゲレオタイプで撮影した。

写真の田中光儀氏は当時、浦賀奉行所の与力として、ペリー一行を迎え、諸交渉にあたっていたと考えられる。羽織袴で帯刀した武士の正装で立ち姿が撮影されている。大きさは縦9.2cm、横6.7cm。ブラウンが世話になった浦賀奉行所の侍を撮影し、本人に渡したものと思われ、画面向かって右下に「E・BROWN・JR JAPAN 1854」と記されている。

【写真発見の経緯】

この貴重な写真は、昭和58年田中光儀像銅板写真の鑑定を写真研究者の小沢健志氏に依頼した結果、「写真史上、また、幕末史上極めて価値が高いものであるから世に公開すべきだ」という進言を受け、志村区長が同年10月にマスコミに発表した。世界でもブラウン・ジュニア撮影の現存する数少ない銀板写真で、上記の撮影の由来など、幕末の開国に関わる歴史的な出来事とこの写真が撮影された経緯の関係なども小沢氏の調査で明らかになった。

その後、貴重な写真であることから、良い状態での保存と公開のため、東京都写真美術館(目黒区恵比寿ガーデンプレイス内)に寄託し、平成15年の「土(さむらい) - 日本のダンディズム展」および平成17年の「開館10周年特別企画展」などで公開されている。

【問い合わせ】 区長室 広聴広報課 電話 3993-1111(代表)